

《研究会評》

# 飼い馴らされることのない

## 詩と批評の力を今ここに

柿木伸之

最近機会があつて、熊谷博子監督のドキュメンタリー映画『三池』を見た。日本の近代を支えた炭鉱とも言うべき三池の坑道で過酷な労働を強いられ、生存のために闘い続けた人々のいくつもの声の銜を証言のうちに響かせるこの映画において、証言は時に歌に変わる。組合でもに闘った仲間たちと歌った歌に、あるいは遠い与論の歌に。これらの歌のうちには、身体のうち深く刻み込まれた三池における生の記憶が、それも他者とともに全身で生きた生の記憶が、銜となつて響いていよう。『三池』を見ていて、そのような歌に引き込まれながら、同時に自分自身の現在を振り返らざるをえなかった。今広島に、このような一人ひとりの身体的な経験の記憶を響かせる歌が歌われうる場所があるだろうか、そこにある記憶の銜が聴き取られる余地があるのだろうか、と。そう考えたとき『三池』の映像は、ドキュメンタリーでありながら一つのユーロピアを現出させるかのようだった。

ここで歌うことを、『三池』に聴かれるような節をもった歌だ

けに限定せず、何らかの意味で詩的に語ることも含めて考えるならば、広島現在の特徴づけるのは歌うことの退化である。それを象徴するのが、小田智敏が研究会の席上で苦い皮肉に燃えながら歌つてみせた「オバマジョリティー音頭」であろう。しかもその「音頭」は、広島における歌うことの退化がコンフォームイズムの浸透と一体となっていることを、はしなくも体現している。現在、広島市長を中心とするいわゆる「平和行政」が「オバマジョリティー・キャンペーン」を推進しているが、そもそもこのこと自体が、アメリカ合州国のオバマ政権が戦略的な「希望」として掲げる「核なき世界」と、「平和」の理念とを無批判的に重ね合わせることで、「テロとの戦争」によつて「グローバルイズム」の領域を拡大している今日の世界の「マジヨリティー」に認めてもらおうとする模範的かつ体制翼賛的なマイノリティーの求愛の身振りにほかならない。これに呼応した「音頭」が作られてしまうというのは、広島の人々がこうしたコンフォームイズムを内面化することによつて歌うことを退化させ、さらには東琢磨が報告のなかで述べていたように、陳腐さの上に胡座をかいていることの証左以外の何であらうか。

このようにして歌うことすらも「マジヨリティー」の道具となるうとしている広島では、忘却の流れに抗う詩も、馴致されえない身体を自由を響かせる歌も、もはやほとんど聴かれなくなっているどころか、これらを表現者自身が抑圧しているかのようだ。このとき、ヴァルター・ベンヤミンの言葉を借りて言えば、「死者たちさえも安全ではない」。そのような危機的状況にある広島において、「広島／ヒロシマ」をめぐる文化運動を「再考」す

る研究会が開催されたことは、詩的に語ることを含めた歌う営みが共有されていた運動の現在をそのアクチュアリティにおいて甦らせながら、今ここにある危機を照らし出す希有な機会だったのではないだろうか。とりわけ、水島裕雅が報告のなかで、峠三吉を中心に組織された「われらの詩の会」の記憶を呼び覚ますとき、現在の「国際平和文化都市」の文化ならざる「文化」に欠落しているものを突きつけられる思いがした。

水島の報告によれば、ジョン・ダワーのような歴史家が描くところとは異なつて、占領下のプレス・コードがあるなかでも広島の人や俳人はいち早く活動を再開し、原民喜の「夏の花」、太田洋子の「屍の街」といった小説作品、栗原貞子の『黒い卵』のような詩集も現われていた。そのような時期に峠が仲間たちと組織したのが、「われらの詩の会」にほかならない。それは詩人の同人組織としてではなく、働いて生きる人々のなかから詩を掘り起こしながら、詩人自身も詩を磨いていく場として構想され、ここでは詩的に語る者たちの「愛」による結びつきが重視されていたという。そのような「われらの詩の会」の詩誌『われらの詩』は、一九四八年から二十号が刊行されることになるが、水島によると、そこに集められた詩には被爆体験を主題としたものが多いとはいえず、けつしてそればかりではない。戦争体験を踏まえながら再準備に、さらには戦争そのものに反対する内容の詩も多く、数のうえではこちらのほうが多いくらいであるという。たしかにそこに響いていた反戦の声には、詩人自身の未だ生々しい戦争の記憶、それも戦争「被害」の記憶にもとづくものが多かったかもしれない。しかし、戦争の暴力に、その継続にみずからの言葉を

もつて向き合った詩がこれほど書かれていたことを、けつして軽視することはできない。やがて朝鮮戦争に巻き込まれていく流れに立ち向かう詩の言葉たちが、『われらの詩』をつうじて語り継がれ、共有されていたのだ。「核なき世界」を目指すという姿に見とれて「テロとの戦争」の継続に対して目を塞いだ広島の人々が忘れ去っているのが、このような詩の言葉の記憶にほかならない。

ところで、『われらの詩』には、平和と民主主義の実現へ向けた、あるいは「女性解放」へ向けた闘いを主題とする詩も数多く収められていて、そのことを含めてこの詩誌は、抵抗精神に貫かれた雑誌と言えようが、それに加えてこの雑誌を特徴づけるのは、批評の精神であるという。水島によれば、「われらの詩の会」では作品の相互批評が盛んに行なわれ、峠の詩も批評の対象になった。そして、峠が死の直前に書いたというエッセイ「広めることと高めること」が示すように、このことを峠自身が推し進めていたのだ。このように、詩の創作とその批評とが一体となっている点は、初期のドイツ・ロマン主義の文学の運動に近いものを感じさせるが、「われらの詩の会」の運動において特筆されるべきは、ロマン主義の運動よりもはるかに幅広い層の人々が創作と批評の双方に参加していたことであろう。言葉を高め合うことによつて来たるべき世界を想像しようとする力が、それ自体が闘いであるような生の現場から湧き上がっていたのだ。その記憶は、文学の、そして芸術のこれまで顧みられることの少なかった潜在力を開示してはいないだろうか。

とはいえず、詩作が批評と結びつきながら一つの運動を形づくる

ためには、まず詩的な言葉を介して人と人とが出会わなければならないし、それ以前に、これまでみずから語る言葉をもたなかった者たちが、そのような言葉を求め始めなければならぬ。『山代巴の文学／運動』をめぐる竹内栄美子の報告は、こうした文化運動の原点にある問題を踏まえながら、民衆自身の「集団的意志」の形成へ向けた山代という作家の修辭の戦略を読み解こうとするものであった。

竹内によると、尾道を拠点に農民文化運動を繰り広げていた中井正一の講演に触れた山代は、中井の言う「純粹な媒介」として、女性たち、とくに農村の女性たちの声を汲み上げようとしていた。山代の作品は、今まで声をもたなかった彼女たちに声を返し与えることへ向けて書かれているのだ。しかし、従属を美德とする封建主義的な意識がなおも支配的な場所にあつて、女性たちにもみずからの声の存在を、さらにはそれを抑圧するものを気づかせることはけつして容易ではない。そこで山代は、よく知られた歴史上のエピソードを巧みに例示する中井の手法に学びながら、「錐蛙、箆どじょう、樽蛇」のような伝承にもとづく譬喩によつて、封建遺制を伝えようとしたのだ。たしかにそのような山代の修辭法は、松本麻里の紹介する谷川雁が批判するように、ある種の分かりやすさに訴えるものであるかもしれない。だが、それは同時に、封建遺制の下にあつて忍従を内面化した女性を否定し去るのではなく、むしろそうした女性を出発点にしてこそ女性の解放は可能だとする山代の基本的な姿勢を示すものでもあろう。それは、「一人の百歩より、百人の一步」というフレーズが見事に表現しているように、敵でもあるような隣人をもけつして切り捨てるこ

となく、民衆の「集団的意志」の形成へ巻き込んでいくための戦略でもあるのだ。

このような山代の修辭法は、ギリシアの古典の研究者でもある小田実が「人間・ある個人的考察」——この論文を収めた『難死の思想』を、この研究会の前日に道場親信たちと広島島の「地下大学」で読んだのだ——で語っている、「ベトナムをふくみ、黒人を包含し得る」来たるべき「修辭学」の構想とも接続されるかもしれないし、また歴史に記されることのなかった民衆の伝統——再びベンヤミンの言葉を借りて言うなら、「抑圧された者たちの伝統」——を継承する可能性を開くものでもあろう。そして、この伝統を継承するとは、自分たちを虐げてきた歴史の連続に抗う手を手にすることであるはずだ。今、その声を解き放つに至るまでの回路が、山代たちの文学的実践のなから探り出されなければならないのではないだろうか。

今回の研究会では、「われらの詩の会」と山代巴の詩的実践のほか、山代と交友のあつた画家の赤松俊子が夫となる丸木位里とともに制作した「原爆の図」の全国巡回展の軌跡が岡村幸宣によつて報告され、この「原爆の図」が日本全国を巡回し、さらには世界中を巡っているのとはほぼ同時期に生まれた合唱曲「原爆を許すまじ」の普及を可能にしたサークル運動の歴史が道場親信によつて報告されたが、これらの運動とともに注目されるべきと思われたのが、小沢節子によつて報告された、丸木位里の妹にあたる大道あやの画家としての生きざまである。

小沢の報告によれば、大道は被爆市民の絵画である「原爆の絵」こそが「本当の原爆体験」の表象であるという認識のもと、丸木

夫妻による「原爆の図」を、非体験者による「体験の占有」に道を開くものと批判しながら、九十歳を過ぎてから自分自身の体験にもとづく「原爆の絵」を描こうと試みる。しかし、描くうちに強烈な体験の記憶が甦つてきて、制作を中断せざるをえなかったという。体験を表象しようとするなかで、その体験自体が表象不可能であることに直面せざるをえなかったのだ。小沢によると、その際の葛藤そのものが一つの表現となっている。その表現は、絵を何かの表象として見ることを中断する強度において経験されるだろうし、それはまた——小沢も指摘するようにともすれば一枚岩のものとして一括りに語られがちな——「原爆の絵」の一枚一枚にも描き込まれているにちがいない。そして、今重要なのは、表象の空隙ないし絵の沈黙に触れる経験にもとづいて、一つひとつの作品の内実を、平準化と陳腐化に抗して語り出すことであろうし、そのことは今や広島で忘れ去られつつある文学の営みに関しても求められているのではないだろうか。

今回の研究会を契機に、過去の遺産を相続しようとする文学研究、さらには芸術研究が、作品そのものへの沈潜にもとづいてその核心的な内実を浮かび上がらせる批評的言説に結実していくこ

とを願っている。東琢磨が指摘していたように、広島において歌う営みは、一人ひとりの経験を語る言葉が、その経験を平準化しながら暴力の継続に同調する傾きをそれ自体として有している、法と自然科学の言葉に従属していくなかで、しだいに萎縮していったのであろうが、その要因の一つが批評の衰退と思えてならない。「われらの詩の会」にあった相互に高め合う批評が介在して初めて、歌の力が解き放たれ、詩的な言葉たちが響き合う空間が、今ここに切り開かれうるのではないだろうか。このときにこそ、過去の文化運動の遺産が、そこにある抑圧された者たちの伝統が、そのアクチュアリティにおいて継承されるはずである。

#### 【付記】

本稿は、戦後文化運動合同研究会と原爆文学研究会の合同の研究会「(広島/ヒロシマ)をめぐる文化運動再考——「つながり」と想像力の軌跡」の一参加者としての印象を綴ったものである。刺激的だったこの研究会に参加する機会を設けてくださった両研究会の関係者の方々に心から感謝申し上げる。なお、文中で報告者等の敬称は割愛させていた。だいた。